

*お申し込みは、
別配布の申込書で

題材法話

＊前号からのつづき

〇おごりの心

一般的に、私たちの世界では、願い事が大きければ大きいほど、それを成し遂げるのには困難や努力が大きくなるのが常識です。とくるところが、私のいのちの問題を解決しようとする大問題であるのにもかかわらず、阿弥陀様は全てをまかせよと仰り、わたくし側の努力など一切必要ないと仰るのです。

「少しは私の努力も必要であるはずだ」などと考えてしまいましたが、実はそのように思う心こそが、「驕慢心」といわれる「おごりの心」であり、お念仏の世界を最も遠ざけてしまう心なのです。

「往生ほどの大事、凡夫のはかろうべきことにあらず。ひとすじに如来にまかせたもうべし。」という言葉が



あります。

仏になる力など全くあるはずがない私だからこそ、阿弥陀様は、本願をお建てになられたのです。

〇母親に抱かれる幼子

幼子が母親に見守られてすくすくと育っている姿を思い浮かべて下さい。成長する覚悟を持っていくでしよるか。

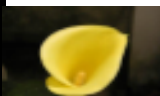
幼子は母親にお願いをし、育ててもらっているのではありませんか。

ちがいますよ。すべては母親のわが子の成長を願う「慈しみの心」によつて成り立っているのです。

てが、幼子のはからいではなく、母親の願いのなか包み込まれて、完成されている世界なのです。

この世界は、「願えばかなえられる」「努力すれば報われる」といった一般的な私たちの常識を超えた世界であります。

〇阿弥陀様の一人子



私と阿弥陀様の関係も全く同じなのです。

阿弥陀様は私たち一人ひとり、を、「一子地（ひとりださ）つてお呼び、慈しんでくださる」とお呼び、慈しんでくださる心にお任せしていただくとき、はなしかうたさざる「など、いかに私のはからい、浅はかなものであつたかに、気が付かさせ、さらには阿弥陀様は、「我々が名を呼べ（お念仏を称えなさい）」と仰られています。

母親として一番嬉しいことは、「お母さん」と幼子から呼ばれることだといわれます。

「お母さん」と呼ばれるただその一言で、母子の心が通じ合い、親子のいのちが一つにとけあうのです。

つまりお念仏がそれなのです。

お念仏を称えるということは、けつして仏になるための条件などではありません。

ん。苦しむときに「な

ん。念仏も本物ではあ



りません。

が間違ひなく仏となれる世が、間違った阿弥陀さまと私の呼び合いなのです。

「南無阿弥陀仏」の声はひとつに、味ふたつ親の呼ぶ声の子のしたふ声。

ぶ。はるか昔から、まよいの世界をさまよい続けてきたこの私が、阿弥陀さまの「な」が断ち切られ、さとりの世界に生まれることが保証された。いわゆる、「後生の一大事」が解決したということです。

生を送ることができるのです。

法然上人は「生きらば念仏申さん、死なば浄土へ参りなん」とてもかくてもこの身には思い煩うことぞなき」と充実した人生の心境を語っておられます。

親鸞聖人は、その安心の世界の成り立つ仕組みを、この4句に凝縮して讃嘆されておられるのです。

5月例会住職法話より

